リ（極細イタリア麺）入りポタージュを作る。鍋を落とす。僕は壁に向かって腰掛けに座る。僕のデカいケツが腰掛けのあちこちからはみ出している。腹に肉がつきすぎて、自分のチンポも、プラスチックのへりで押しつぶされたキンタマも見えない。僕は冷えた台所で真っ裸でいる。

僕は大きな音をたてて食べる。行儀の悪い子供が、そのまま老人になったようだ。僕はおまえを一生愛していた。そう信じていた。

彼女はパリのどこかで踊っている。彼女は僕も上手に踊ると思っていた。ずっと昔だ。僕はそれほど彼女と一緒に踊らなかった。わかっている。もう一度寝ることにしよう。廊下を歩きながら、僕はポスターを見る。僕が話題になっているポスターだ。映画や舞台のポスター。これまでの足跡。希望の足跡。恋人よ、あのとき人生はまだときどき、ゆるやかに舞い上がって輝いていた。その当時僕はものを作り出していた。創造していた、そして重要なことはそれしかないと信じようとしていた。僕は一本の花の、赤や黒の色でしかない、それも花をつけずに、人の目をくぐりぬける。灰色の猫がうろついているようだ。視線が僕にじっとそそがれている。暗い庭の奥に、一本の花が眠っている。さあ、この老いぼれ！　おまえは一度として花であったことはなかった！　さあ、もう寝るんだ！　廊下で倒れたりしたら、娘を心配させるぞ！